

国立新美術館の「ルーヴル美術館展」に行った。テーマは肖像芸術だ。

肖像の起源は、古代エジプトにあり、死者が来世でも生を得るために亡骸をミイラにする際、その頭や人型棺の蓋の頭部をマスクで飾ったことにあるという。このようにもともと葬礼美術であった肖像は、やがて自分や愛する者の記憶を、永遠にこの世に残したいという願望を果たすものとなり、王侯貴族から平民にまで共有されるようになる。

人間には、時代や地域を超えて、死への恐怖から逃れ、永遠の生を求める気持ちと、すべてを支配す

新美術 時評

近藤誠一

これはAI（人口知能）がどこまでどの領域に踏み込んでくるかという問題と密接に関係する。人間といえども一種の精巧な機械

学習することができるようになった。だが死ぬことのないAIに、どこまで人間のような死への恐怖、どう生きるべきかという規範意識や美意識が育つだろうか。これこそ「心」が何か科学的に解明できていない今、人間がロボットにとって替わられることのない分野なのではないか。

「どう生きるか」は正解がない問である。死ぬまで自分で考え続けなければならぬ。それが人間として「生きる」ということであり、その場を与えてくれるものが芸術だ。

いま話題の『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）は言う。芸

どう生きるかを学ぼうとしよう

る者への祈りや感謝の気持ちを表現したいという強い欲求があるようだ。それが次第に芸術として発展し、様々なジャンルに細分化された。芸術は人が人として生きることにそのものなのだ。

しかしやがて資本主義が栄え、何事もお金で価値が計られるようになる。芸術作品への関心はその本来の目的ではなく、市場価格（いくらで売れるか）や、有名な作品がオークションでいくらで落札されたかに向かうようになってきた。若い人たちも自ずと芸術をそういうものとして見るようになってしまっ。これは人間にとって深刻な問題を投げかける。

なのだから、いずれすべてAIがとって替われる日がくると予言する科学者もいる。そうならば人生は完全に合理的に処理され、芸術は不要になる。

しかしロボットが決定的に人間と違うことがいくつかある。その一つが死への恐怖や死後の世界への願いだ。ひとつは、死ねることが分かっている。だがそれがいつ来るかわからないし、その後自分がどうなるかも分からない。だからせめて生きている間は美しく生きて、それを永遠に残したいと思う。ロボットにはそれが無い。AIはプログラムされたことを実行するだけでなく、自分で考え

術は説明して分かるものではない。味わって初めてその面白さを知ることができる。そして優れた作品に接し、感動することで初めて心の目、心の耳が養われる。同様に人間らしく生きてみて初めて人間として生きるこの意味が分かってくる。

戦争に突入しつづけた80年前に中学生のために書かれたこの本がいま話題になっているところとは、ITによって人間性喪失への不安が社会に広がっていることを示しているのだろう。芸術が本来の役目を果たす出番である。

（元文化庁長官）

近藤文化・外交研究所代表